

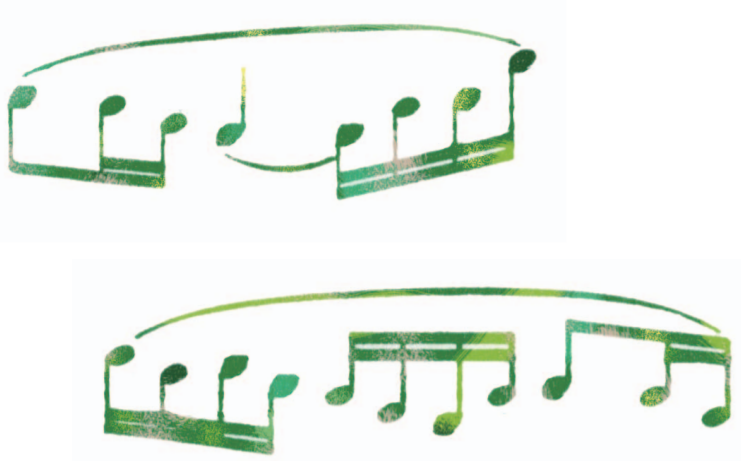
笹舟あらい  
海禁今日子

都市の流れ、郊外の笹舟です。西日が朝日のよう、まぶしさのうすれ、どちらでも。地下街があったはず。親しんだつもりでした。行きかたを忘れたのか、行かないうちに変わったのか、降りることができません。都市のはずれのかつての川へ。暗渠で、流れは見えないが、あらたな隣町との境界になっている。そこでなら、あるいは。通じているかもしれない。現実（なのだろう）の、ここは以前、田んぼだけだった頃の名残で、用水路、溝が今でも多いのです。あらう、あらたまる、あたらしい、元は同じ言葉だったという。\* あらつて、ふるいものがなくなり、あたらしくなる。日没。太陽が冥界へいなくなつて、また朝には、夢（なのだろう）の景と、現実のそれが、溝のなかで、あらわれ、さざめくのだろう。霧の、おおむねの朝。一軒家にとどりついたことが。ふるい家を、庭のまわりの溝を、小舟のようにまわるのが、あたらしいわたしなのか。はい、いいえ。どうしても入れません。だれかが家のなかにいるのが見えました。知つている。十数年前にいなくなつた人だった。溝の向こうから、指をさして教えてくれた。西だったか東だったか、ありがとう。晴れてきた霧のこちら、徐々にまぶしくなる。あちらですね。その方向に、溝のなか、川なのか、植物たちが取り囲んで、わからない流れがある。いつも水に、あいさつをかわすのが、郊外に来てからの大切な日課です。都市の眠り、ふるいもの、あらたまつて、だから行けなかったのだ。溝にはほれでも魚が泳ぐ。地下が降り、昇つたなら、また笹舟を。しめつた空に日がじむ。西あるいは東へ。あらつて、さようなら。また、行くよ。

\*中西進「日本神話の世界」

親指  
平井達也

雨傘の折れた骨を弾いて瓢箪のただ一点を打つたとしてこの音が発せられるのはその一点のみなのかな  
雨傘の骨が折れたのは地の果ての巨大な瓢箪からの風がこの一点を打つたから鳴ると同時に折れる音  
長さを持たずにただ折れている音  
折れという存在のありよう  
瓢箪のくびれから運命が吹き出る  
瓢箪のくびれには雨傘で立ち向かう  
運命のただ一点を打つたとして長い骨は鳴るか  
雨傘捨てずに行く瓢箪は帰着できるか  
記憶と全く同じ音の場に  
瓢箪はクラインの壺とは別だ  
骨は雨傘の裏だ  
運命にはいくつものくびれがあり  
きみだけが何かを知っているということ  
きみが完全に孤独だということだ



ささやき  
小島きみ子

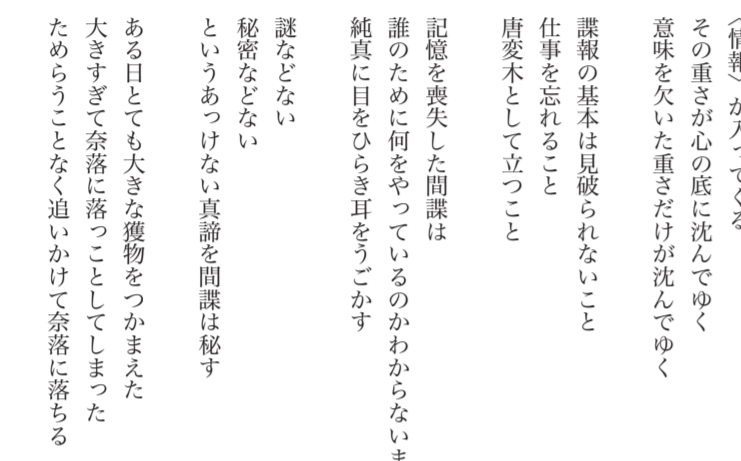
「わたしのさみしさを樹木は知り、壺は傾くのである。そして肩のうしろより低語き、なげきは見えざる玩具を愛す。」  
白薔薇の花の小径を歩いたのは、九月の夢の、森の植物園だった。このあと、二年経って現実の植物園を訪ねたのだった。枯れた色が美しい花の群れに出会ったのは、一回だけだった。白い花が終わっていくときの、《ささやき》は、記憶のなかで蘇る。枯れていく花の、茶色とセピア色の濃淡は、茶色は、オレンジ色と青もしくは黒の中間色である。茶を染料として使った時に出る色に由来する、のだが、セピア色はイカ墨から作られる、濃い赤みのある茶色い顔料の色である。枯れた白薔薇に、オレンジ色が混ざっているすると、白薔薇の変化は、詩の言葉の変化になるだろうと思う。そのことを記憶にとどめておきたいと思う。なぜなら記憶とは、崩れて果てていく身体のない幻影であるから。こうして紙に書いておくことで、花と私の身体は蘇る。《わたしのさみしさを樹木は知り》、紙のうえの文字と言葉であるから、わたしはわたしに、わたしはわたしに、《さみしき》を気づかせようと思う。ほら、記憶のセピア色の《ささやき》が、聞こえませんか？  
左手の薬指の指の先ですよ、あなたの指輪のその先の、爪の先端が、緑色にひかかって、思い出、というものを悲しくさせる。わたしはわたしに向かつて、わたしを辛くさせようとする。《わたしのさみしき》を知るものは、詩の中のわたしの幸福だから。

（註）二重括弧内は、山村暮鳥詩集「聖三秘玻璃」、三五編中十一番目の「A FUTUR」の部分。



課  
池田 康

間課の符はエレキ一瞬きらめいて消える言葉の無邪気の軌跡  
間課スラングは誰も解さない  
本人も知らないとしらを切り通す  
そのうち本当は忘れてしまう  
間課であるのは間違いないが誰に仕えているのか定かでない  
せひとも知りたいことではある  
盗んだものはない？  
機密をポケットに入れるとしゃべろうとしてもぞもぞ動く  
間課は黒装束を好まない  
ど派手ななりをして白昼大通りを歩く  
夜は夜風になって吹きぬける  
思わぬところに宝が眠がっている  
間課は言う  
そしていかにも嬉しそうに笑う  
そんなものゴミにすぎないと世人は言う  
《情報》が入ってくる  
その重さが心の底に沈んでゆく  
意味を欠いた重さだけが沈んでゆく  
課報の基本は見破られないこと  
仕事を忘れること  
唐変木として立つこと  
記憶を喪失した間課は誰のために何をやっているのかわからないまま  
純真に目をひらき耳をうごかす  
謎などない  
秘密などない  
というあつけない真諦を間課は秘す  
ある日とても大きな獲物をつかまえた  
大きすぎて奈落に落っこしてしまつた  
ためらうことなく追いかけて奈落に落ちる



縄張り  
二条千河

敵の中をのぞきこむように、耳の穴をのぞく。今季はこれで何人目だろう、近ごろは夏の初めになると耳鳴りを訴える患者が急増して、町の小さな診療所は混雑する。ああ、夷仙人ですね、というだけでは怪訝な顔をされるばかりなので、イチから説明しなければならぬ先生は大変だ。  
——エゾセンニユウ、別名エゾホトトギスともいいますが、警戒心の強い鳥でね、いつも茂みの奥のほうにひそんでいて姿を見せない、その割に声はやたらと大きくて、この季節は朝も晩もおかまいなくひっきりなしにさえずるんです、ジョロビンカケタカ、縄掛けたか？ っつて、雄鳥が縄張りを主張するためにね。中にはうっかりヒトの耳にもぐりこんでしまうものもいて、入られたほうはやかましくてしかたないけれど、まあ、しばらくの辛抱ですよ、繁殖期が終わつたらおとなしく出ていきますから。  
ところが今時の患者は、そう簡単には納得しない。うちはいつだつてきつちりと戸締まりしてから寝てののに、「縄掛けたか？ っつて夜中に何度も叩き起こされて、そのたびに家じゅうの戸や窓を点検し直さなければならぬい、おかげですっかり寝不足だ、とんだハラズメントだ」と。  
あげくには、そんな害鳥は手術でも何でもしてさっさと駆除してくれ、などとうめき散らす始末だ。  
もつとも騒音だの安眠妨害だのという文句は、表面向きという気もしなくはない。要するに、知らない生きものが知らない間に身の内へ居ついてしまっているのが我慢ならないと、そういうことなのだろう。誰だつて、自分のテリトリーを侵されるのは好きじゃない。  
しかし駆除するといっても、下手をして鼓膜を傷つけてもしたら事だし、そもそも鳥の一羽も棲めないような耳にするのが、はたして健康によいことなのかどうか。いずれにしても先生の専門分野ではないから、ひとまずよく眠れるお薬を出しておきましょう、それで少し様子を見ましょう、とお茶を濁すことになる。  
あからさまに不満顔をした患者が診察室を出ていって、ようやく仕事が一段落すると、先生はたまりかねたように盛大なあくびをする。実は先週あたりから右耳の奥に巣を作られてしまつて、ここ数日間うちに眠れていないのだ。それで診療中も、油断するついで上の空になってしまう。  
敵だと思われているんだろうなあ、と自嘲ぎみにつぶやく先生の頭蓋に、またあの声が高らかに響きわたる。  
——ジョロビンカケタカ！

やまない雨に打たれつづける  
明けな夜に立ちつづける  
底なしの奈落へと落ちつづける  
拷問されている夢を見る  
目覚めても拷問されつづける  
間課であるそのことが拷問なのだ  
戦闘はありえない  
逃げるのみ 隠れるのみ  
非力による非力のための卑怯を主義とする  
間課は「課」という文字に首を傾げる  
なぜ「課」ではいけないのか  
なぜ「蝶」ではいけないのか  
蝶は飛ぶ 地雷の上を  
常識の矢不ずまの上を  
現実という火災の上を  
間課の極意はふつうに見聞きすること  
そして理解してもしなくても覚えておくこと  
そしてそのまま誰にも言わないこと  
間課はくたびれている  
このくたびれの如何を研究するのが彼の趣味  
それは世界のくたびれに通ずるから  
間課はさびしい  
このさびしさを分析するのが彼の道楽  
それは宇宙のさびしさに通ずるから  
間課は不安  
この不安をもてあそぶのが彼の悪癖  
それは現世の不安に通ずるから  
間課は屈託する  
この屈託を分解するのが彼の仕事  
それは人類の屈託に通ずるから  
課は蝶にはなれない  
悪の血が流れている  
十貫の罪の重荷を背負う  
間課が仕えるのは誰の心  
心から誰の心へと伝わる 課報  
心と誰の心はひとつなのだが  
誰に仕える  
本当は誰の心の秘密を知らねばならない  
そのことに間課は気づいていない

